令和３年度厚生労働省委託事業「諸外国の栄養政策立案・展開支援を担う専門人材の育成に向けた調査等一式」

目的

- この事業では、主に栄養の専門職を対象に国際保健政策に関する知識と、世界の潮流を踏まえた政策立案ならびに展開を支援できる人材育成の仕組みの構築に向けて、大学院等での教育内容として必要な事柄等について調査を実施しました。その一環として、実際に国際的に栄養分野でご活躍されている先生方のご経験についてインタビューで伺った内容を紹介します。

○　力丸　徹さん（元 JICA 国際協力専門員）

Q. どのようなご経緯、動機で栄養を専門として国際分野で活動されるようになったのですか。

A. まず大学院のときにパプアニューギニアの栄養調査に関わる機会があり、現地でオーストラリアの研究者を含め国内の様々な大学の先生方と一緒に調査できたことが非常に印象に残っています。異文化に触れた初めての機会であり、非常に異なった食生活を目の当たりにして、「これは面白い」「途上国の栄養は非常に興味深い」と感じました。それが国際栄養分野に興味をもった最初のきっかけだと思います。2 回ぐらい現地に行って、トータル 6 か月間ぐらい現地で生活したのですが、その経験は、10 年分か 20 年分ぐらいの凝縮した人生経験をしたなという実感でした。この調査の目的は、低タンパク質食への適応メカニズムとか食塩と血圧の関係など調べることでした。

それから、大学院を修了後、東京都老人総合研究所（現在は東京都長寿医療センター）栄養学研究室に勤めましたが、そのときに JICA がガーナで支援していたプロジェクト（ガーナ大学野口記念医学研究所プロジェクト）の専門家として携わる機会がありました。現地の栄養不良の子どもの調査を実施しましたが、「こんなにも栄養不良の問題が世の中にまだ存在するのだ」ということを実際に自分の目を通して知る機会を得ました。調査データからも明確に実情を確認できました。栄養学の勉強してきた人間として、ここに自分の生きる道があるのだと、そのときに実感しました。ただ、自分はそのとき研究所の職員だったので、今後、そういった経験が活かせるかどうかはあまり分かりませんでした。その後、JICA の国際協力専門員という制度を知って、研究者の道を捨ててそちらに応募することに決めました。

自分のバックグランドや能力がその道で活かせるかは確信をもってはいなかったのですが、ただやりたいという気持ちが先走っていました。英語の勉強は津田英語会という津田塾系の学校の夜間コース（国連英語クラス）に 1 年間通って国際協力専門員受験のための勉強をしました。そのぐらい当時はやる気がありました。これらの経験を踏まえて、国

際協力の道に入りました。

JICA の国際協力専門員になりましたが、その後にアメリカのカルフォルニア大学デービス校国際栄養学プログラムに visiting fellow として留学することになりました。受け入れてくれたのは、国際栄養分野では著名な先生で、ガーナ赴任時にお会いし、先生のホテルに押しかけて直談判して受け入をお願いしました。留学期間は 2 年間でしたが、この時の経験も非常に大きなプラスになっています。

Q. 留学や大学院進学を考えたきっかけはありますか。留学や大学院進学がどのようにご自身のキャリアに影響したと思いますか。

A. 大学院進学に関しては、特に国際分野に進むから、ということは考えてはいませんでした。ただ、先ほども言ったように、2 つの大きな経験が国際栄養活動につながったと思います。やるにしても、きっかけや機会というのは向こうから来るわけではないと思います。自分がパプアニューギニアの調査に参加したのも、最初、現地に行く先生がいて、その先生にねじこんで「連れて行って欲しい」と頼んだからです。「お前は学生だし、駄目」「だけど、自分で金を出すのだったら連れて行くよ」ということだったので、自分でお金を工面しました。貧乏学生で、60 万円を親や兄弟から借金して、その金で参加しました（借金は踏み倒してしまいましたが)。そういうのめり込む気持ちが当時はあったのだと思います。

留学でも、この先生のところに行きたいと思ったら、その先生をつかまえて「自分を引き取ってくれ」という交渉をしましたし、留学するための資金が要るので奨学金も探しました。私の場合は、幸い FASID（当時は外務省の外郭団体）から奨学金をもらうことができました。留学する場合は、資金を確保しなければならないという大きな課題があると思います。これからは、そういう道に進む人が、敷かれたレールの上をうまく走るということはあり得るかもしれませんが、そのレールを自分で見つけ、飛び込んでいく、つかんでいくという姿勢が必要であるという気はしています。

キャリアへの影響に関してですが、大学院が直接的にどのようにキャリアに影響したのかは明言できません。大学院のカリキュラムには国際栄養という学問が全く含まれておりませんでしたので、直接的には役立っていないかもしれませんが、調査研究の指導などの必要性がありましたので、部分的には大いに役立ったと思います。留学は、国際栄養に関係する基本的なノウハウを学ぶことができたので、私のキャリア形成には大いに役立ちました。当時は、国際協力の中で栄養分野は非常にマイナーでしたので、自分の専門を変更することさえ検討しましたが、留学により、「栄養」を背中に背負う自信がつきました。

Q. 栄養専門人材が活躍する機関、国・地域、支援分野には、どのようなものがあるのでしょうか。

A. これはすでに皆さんご存知のところばかりだと思いますが、国際機関は WHO、ユニセ

フ、WFP、FAO 等、多々あります。ただ、細かく言えば世界銀行や、アジア開発銀行も該当しますし、ILO、UNHCR、IAEA、UNFPA など、色々なところに栄養の専門家が入り込んでいますので、それらの機関にも、栄養人材が活躍できるポジションはあると思います。ただ、日本人が簡単に働くことができるかと言いますと、枠も限られていますし、なかなか難しい点もあるかもしれません。ユニセフや WFP には regional offices や country offices があるので、そういうところに入っていって、自分のキャリアを積むことは可能かと思います。それから、国際機関以外では、バイラテラルな援助機関、例えば JICA などが挙げられます。それから海外では、例えばアメリカの USAID、CIDA、DFID、EU、AUSAID など、大きな国には援助機関があり、栄養の専門家が携わっています。日本人が外国のバイラテラル援助機関に行って働けるかというと、少し難しいですね。今のところ、JICA ぐらいかと思います。JICA には何人かの栄養の専門の人が活躍しています。それから、国際 NGO でも大きな組織がどんどん増えてきているので、そういうところに入るのは 1 つの方法としてあるかもしれません。日本の NGO も勿論そうです。私は味の素ファンデーション [1]の委員を務めていて、栄養に特化したプロジェクト実施するＮＧＯに対して協力資金を出していますが、こういった NGO も候補になるはずです。それから、コンサルタント会社がドナーの協力機関となり、国際栄養活動を実施するケースも増えています。また、最近はビジネス連携協力が重要だと言われてきたこともあって、民間会社が独自のアイデアで栄養改善の活動に参入してくるところがどんどん増えてくるのではないでしょうか。

1) http://www.theajinomotofoundation.org/

栄養活動する国とか地域に関しては、それぞれ国際機関、バイラテラル援助機関、NGO によって異なってきます。国際機関は世界各国を対象にしていますが、バイラテラルは、その国の独自の方針に併せて対象国を選別しています。NGO も同様です。しかし、全般的には、子どもや母親の栄養不良の深刻な地域、国に重点を置く傾向にあります。JICA はアフリカや南アジアに重点を置き、南米などはほとんど栄養分野での支援をしていません。青年海外協力隊の隊員派遣は地域を特定していないように思われます。生活習慣病対策などで活躍できるので対象国の幅は広くなるのではないでしょうか。

支援分野を限定するのは難しいのですが、あえてリストアップすると次のようなものがあります。母子栄養改善、公衆栄養サービス改善、学校栄養、食料栄養安全保障、緊急食糧援助、生活習慣病対策、人材育成（マネージメント、情報システム、調査研究、政策立案）など。

Q. 様々な機関がある中で、栄養専門人材はどのような役割を担っているとお考えですか。

A. 国際機関、バイラテラル援助機関および NGO とで、役割はそれぞれ違うと思います。JICA で 30 年以上働いていた立場から言うと、日本の専門家が期待される役割は、栄養プロジェクトの立案や実施・運営が基本になります。また、その国の栄養政策策定、栄養関

連ガイドラインを作成する協力も行うこともあります。プロジェクトも栄養政策もそうですが、実際に自分たちがリードして進める場合もあるし、バックとなってサポートするやり方もあります。一番いいのは、サポートする姿勢を強調しながら実際には自分たちが後ろからリードすることだと思います。能力のあるところは全面的に任せてサポートすればいいですが、そういう国ばかりではありません。一般論ですが、サポートする日本側人材の能力によっては十分にリードすることができないこともありますので、基本的には相互が協力してやって行くことが一番重要なのでしょうね。

それから相手国のための人材育成という役割もあります。私の最初の取っ掛かりはガーナ大学野口記念医学研究所で、研究員の人材育成に携わったことでした。実際に現地の人材と研究や調査を一緒に行いました。人材育成には様々な取り口があるので、一概には言えませんが、わかりやすいのは、研修の企画、運営、支援、教材作成などです。これに関しても、それなりの能力が求められますので、若手の場合は、現地のカウンターパートと一緒になり関係者や現地の人々への栄養教育などを行うのが妥当なアプローチかと思います。

Q. 国際栄養分野で活躍されている方々の専門分野や資格に特徴はあるのでしょうか。

A. 自分は大学で栄養学を勉強したのですが、栄養士の資格は取りませんでした。国際会議に出た際に、各国の栄養の専門の人にお目にかかって話を聞くことがあったのですが、栄養にすごく詳しい、または栄養学を学んだ人の中に、栄養士だという人はほとんどお会いしなかったように思います。ただ、いちいち確認はしていませんので断言はできませんが。アメリカに留学したときに、ユニセフの事務所を訪問したことがあるのですが、そのときに「ユニセフにはニュートリショニストは何人いるのですか」という質問をしたら、「ニュートリショニストの定義は何ですか」と答えが返ってきました。要するに答えられないのです。つまり、自分がニュートリショニストだと言ったらニュートリショニストで、資格の話ではないと捉えられたのです。なので、そういう場所で働いている栄養の専門家のバックグランドは非常に幅広いのではないかという気はします。それでもマスターで栄養を勉強した人は非常に多かったはずですが。最近の傾向として、栄養がすごく幅広くなってきているというのは感じます。マルチセクトラルトアプローチのような形で、色々な分野と協働する、それから栄養分野に様々な分野の人材が入ってきている、という感じです。少し前までは栄養に特化した取組が重要視されていたので、栄養の分野で何をするべきか、保健分野の中でこういうサービスを強化すべきということで分かりやすかったと思います。そういう場合には栄養の専門の人がリードする形で、色々まとめていったと思います。ところが最近は、栄養の取り組みがマルチセクトラルになってくると、色々な分野の人が入ってきて栄養のことを話されるので、ちょっとやりにくい部分も感じています。これが世の中の流れなのかなと思いますが。非常にマルチになっている感じがしています。それでも、最近の傾向として、NGO でも、JICA の専門家の派遣でも、栄養士の人が徐々に増

えてきていると思います。それは非常に良いことではないでしょうか。しかし、日本国内に限って言えば、栄養分野で国際協力をしている人材の多くは栄養士とか栄養学をバックグラウンドとしている訳ではありませんので、まだまだ日本の栄養学教育に国際的な要素を強化する必要があると思います。そしてマルチセクトラル・アプローチの中核となってリードする人材を育成することが必要です。

Q. 国際保健分野で栄養政策の立案・展開に関わるために、例えば管理栄養士などの栄養の基礎知識がある人を想定したときに、さらに習得が求められる知識やスキル、姿勢としてはどのようなものがあると思いますか。

A. こういうことが最低限勉強しなければいけないのではないかということをノミネートしてみます。もちろん言葉の捉え方によって、それが小さい課題なのか、大きいものなのか、分かりにくいと思いますが、例えば「グローバル栄養の課題」が挙げられると思います。どういう栄養問題が起きて、どういう流れになっているのか。それぞれに対してどういう取組をしているのか。そういうことをまず把握しなければいけないと思います。それをどうやって理解するかというとそう簡単ではないのですが、最近では色々な国際栄養に関連する報告書が出ています。そういうものを理解することが必要なのではないでしょうか。例えば、1 つの例としては、Scaling Up Nutrition（SUN）[2)]のレポートで、色々な情報提供をしているし、流れが分かると思います。各国際機関も栄養のことをすごく取り上げているので、そういうところがどういうことを言っているのか、それからも勉強できると思います。また、Rome Declaration on Nutrition[3)]など、栄養の大きなイベントなどで何をいっているのかを把握することは最低限必要なのではないでしょうか。ちょっと前までは、UNSCN（国連栄養常任委員会）[4)]が活発に活動していました。そこで多様な情報提供をしてくれていたし、毎年会議があって、自分もそこには結構出ていました。色々な報告、情報提供をしてくれたので、国際栄養の動きが分かりやすかったのですが、今は UNSCN と SUN が合併した形になっています。

それからどうしても基本的なこととして、国際的に認知された栄養のガイドラインが挙げられると思います。幾つものガイドラインが出ていますが、公的な機能をもったガイドライン、例えば WHO なりユニセフなり FAO なりの公的に認めたガイドラインはきちんと理解すべきだと思います。そのスキルなくして仕事はできないと思います。

7、8 年前ぐらいから栄養が、国際的にどんどん注目され始めてきています。その背景には、栄養が死亡や疾病の背後要因になっていることが言われはじめたこと、例えば、Global Burden of Disease （GBD）のデータ[5), 6)]などが裏付けにあります。どれくらい栄養が重要なのかという認識がどんどん高まってきたと思います。GBD に関しては時代とともにどんどん変わってくるので、それは理解しておくことが必要だと思います。

自分が JICA にいるときに研修でよく言われたのは、プロジェクトサイクルマネジメント（PCM）でした。これも基本的に現地で活動するときには役立つスキルだと思います。

2) https://scalingupnutrition.org/

3) http://www.fao.org/resources/infographics/infographics-details/en/c/266118/

4) https://www.unscn.org/

5) http://www.healthdata.org/gbd/2019

6) https://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736(19)30041-8/fulltext

Q. 例えば交渉力や調整力というような、こういった能力も必要というものはありますか。もしあれば、それをどのようなトレーニングの場があるといいなど、お考えがあれば教えてください。

A．スキルアップに関して、JICA も実施していましたが、インターン制度の活用があげられます。専門家として、即活躍するためには、ある程度、経験がないと難しい点がありますが、その経験を積む上で、インターン制度を利用するとか、あるいは自分で視察研修の機会をつくる、交渉して入り込むこともいい手段だと思います。うまく交渉すれば受け入れてくれるところは多いと思いますし、もし自分がプロジェクトのリーダーをやっていたら、そういう応募は受け入れたいと思いますね。実際交渉してくる人も中にはいました。自分から積極的に交渉してくる人は、大概能力の高い人が多いように思います。でも、なかにはひどい人もいます。例えば「どこか NGO でインターンをしたいから紹介して欲しい」と頼まれ、自分も現地で探して紹介してあげたのですが、実際始めてみると、考えていたことと違ったのか、はたまた楽ではなかったのか、途中で脱走してしまったケースがありました。インターンは甘くはないので、相当やる気がある人でないと続かないと思います。インターン自体はやはりいい制度だと思っています。

それからこれは理想なのですが、国内に居ても模擬のワークショップをどんどんやってみるとか、そういうことが有意義なのではないかと考えています。それから機会があれば、途上国で実際やっているワークショップのオブザーバーとして参加することもあり得ると思います。交渉力や調整力は経験を積むしかないというところはあるでしょう。

自分自身は、現地で色々なプロジェクトに派遣されたので、そのときに様々な経験を積むことができました。OJT です。それから JICA の派遣前研修です。これは栄養に特化した研修ではないですが、何回も何回も受けたので、それなりに役立ったと思います。あるいは FASID がやっていた PCM 研修[7]など。今は組織が変わってしまって、やっていないかもしれません。あとは JICA の海外研修制度（2 年間の留学）の活用もあります。ただしこの制度の対象になるのは協力隊のような国際協力の経験を持つ人に限られます。

私は、米国国際開発庁（USAID）の主催する「母乳育児管理」という 1 か月の研修を受講したことがあります。これも自分で USAID に出向いて交渉した結果です。途上国の人と一緒に研修を受けたわけですが、すごく立派ないい研修でした。参加者が途上国の母乳育児の専門性の高い人たちでしたので、私は専門性の点で彼らに完全に負けていました。途上国の人々の能力は決して低くはありません。相当しっかりとノウハウを身に着けてお

く必要があります。

それから国際会議は、UNSCN という会議が毎年あって、会議自体は 1 週間ぐらいのものですが、すごく勉強になりました。この会議も、要請されて出席したこともありますが、多くは自主的に参加していました。JICA の中では、何のために行くのだとか、あなたの仕事とどんな関係があるのかとうるさいことを言われたこともありました。自分と JICA との戦いでしたね、あの頃は。今は、JICA は「栄養」は優先度の高い分野と認識していますので、昔とは違ってきています。「栄養」の専門家だということでこれまでやってきましたが、最初の頃は「栄養」を専門家として生き延びることは容易ではありませんでした。JICA の中でいかに「栄養」の存在意義を説いても、理解をしてもらえないことも多々ありました。だから大変な時期があったのですが、最近は風向きが大きく変わったと思います。

最近は nutrition-sensitive approach[8] というのが注目され始めていますし、それから Food and nutrition security[9] というワードが前面に出てきています。ですので、国際的にも、今は食糧栄養安全保障というワードが一般的に使われています。こういう流れは、これからどんどん強くなってくるかもしれないですね。従来のような純粋な栄養ではないものがどんどん入ってきているということです。保健や教育、社会保障、環境と栄養、ジェンダー、人権、衛生の問題、そういうものとの組み合わせになってきますので、いろいろな方向に関心をもって勉強する必要性が高まっています。

それからキャリア形成の課題として、やはり語学の問題は大きいでしょう。誰もが感じていることだと思いますが、自分も苦しんだほうです。それは海外に行き始めたのが年齢的に遅かったからです。こういうものは若いときからやらないといけませんね。大学院で国際栄養学専攻のようなものをつくるならば、その時点で足きりをして「英語が全くできない人は駄目」というのは、（それはいってはいけないのかもしれないですが）最低限という気もしています。課題としては、この科目の専攻した場合、関連の職を見つけにくいということでしょうか。実はよく探してみると、民間の会社も国際的なことはやっているし、NGO もやっていますし、国際機関のボランティアなどを経て専門職になる道もあります。そういうところにどんどん入り込む必要があると思います。レールは敷かれていないかもしれませんが、自分で探す形で取り組むことが当面は必要だと思います。栄養の場合はいろいろな分野と絡んでいるので、それなりに多岐にわたるスキルは必要です。言うはやすしですが、実際は本人の能力任せになっているところが大きいのでしょうね。大学院のレベルで国際栄養を本格的に勉強できる場があれば、可能性の枠は大きく広がるように思います。

最近、生活習慣病の問題を含めた過栄養と低栄養とどちらが重要かといわれれば、自分は両方、重要だと思います。ただ、栄養がにわかに注目され始めたのは、GBD の考えをバックにして、栄養不良とか飢餓が経済発展にマイナスの影響を与えているということが注目されたことが大きいと思いますので、基本的には低栄養、栄養不良に対する対策が優先される可能性はあると思います。色々な国があるので、その国の経済状況によって中心課

題は違いますし、一概には言えないと思っています。

7) https://www.fasid.or.jp/pcm/
8)https://www.wfp.org/publications/nutrition-sensitive-approach-food-and-cash-based-transfers-mozambique-2021←モザンビークの一例
9)https://www.unscn.org/files/Annual_Sessions/UNSCN_Meetings_2013/Wustefeld_Final_MoM_FNS_concept.pdf

Q. 先生が JICA でバイラテラルな案件で前線にいらっしゃった時に、バックヤードとして国内の大学や研究所をうまく活用したとか、そういうケースはあるのでしょうか。大学が、ある部分的な知恵や仕事を提供する、バックヤードとして機能すれば、そういう機会を活用し、大学院の学生が国内にいながらインターンシップ的な意味合いでトレーニングをすることも出来るのではないかと考えて伺います。

A. 以前、ガーナ大学の研究所にいたときは、完全に日本国内の大学のサポートの上で成り立っていました。それは大学や研究所からしか人が派遣できないという状況にあったためです。だから JICA も大学とか研究所を重宝していました。ところが、だんだんと大学や研究所が人を出すのが難しくなってきて、そこでのつながりが途切れてしまいました。大学や研究所を頼れないということで、コンサルタントの会社に人材派遣を頼るようになってきた流れがあります。大学が公的な役割でなくとも、ノウハウをもっていて一部サポートしますよ、ということであれば協力関係が築ける気もしますが、現在は関係が薄くなっています。バックヤードとしての機能をどこかの大学と連携して行っているというのは、現在の制度としてはありませんが、個別のケースとしてそういう可能性はあると思います。JICA としても途上国の人材を送って研修してもらうとか、そういう希望があります。何らかの形でつながりがあることは JICA も期待していることだと思います。

Q. JICA のインターンは、どれぐらいの期間のものが多いのでしょうか。また、どのように募集しているのでしょうか。
A. 私は現在の制度を知りませんので申し上げることはできませんが、以前は JICA の制度としてインターンを受け入れていました。2 カ月とか 3 カ月ぐらいの期間だったと思います。ただ、途中で、予算がなくなってきたという問題があって、そのときに急に人数と期間が短くなったはずです。コロナの問題もあるので現在はサスペンドされていると思います。今後復活するのではないでしょうか

Q. 語学は、どれぐらいのレベルが要求されるとお考えですか。また、読む、書く、聞く、話す能力のうち、どれが一番重要だと思われますか。

A.　それは答えようがない質問ですね。話すことも重要だし、書くことも重要。ただ、途上国の人には、英語をうまく話すことができてもあまり正確に文章を書くのが苦手な人もいます。ある程度、書いて話さないと、人がついてこないという実態はあります。海外でどのような人を対象に仕事をするかによってですが、より重要なレベルの人と仕事をするときは、話すことも重要ですが、書くこともより重要になってくると思います。

Q. バイラテラルでも色々な国があると思いますが、ここは日本にサポートしてもらいたいという、途上国側から見た日本の強みと言いますか、他の国が認識している日本の強みはどういうことがあるとお考えですか。

A. 表向きに言うことと、内面で思っているところと、違うところがあると思います。今はJICA が栄養分野で力を入れているのはアフリカです。国が栄養をサポートするという動きがあるし、それがこれからも増えていくと思います。ただ、栄養分野で、向こうの人が日本に期待している、サポートしてほしいと思っている分野が何かについてはちょっと分からないところがあります。アジアのほうが日本にサポートして欲しいと思っているかもしれません。ネパールとかカンボジアとかラオスなどの、貧しくて栄養問題があるところは、日本に対する期待感はあると自分は思っています。学校栄養に関する期待という点では、経済レベルの高いアジア諸国など、日本に対する期待感はあるかもしれません。実際は、レベルの高い国は、援助の優先順位が低くなってしまうので、なかなか支援するところまで行かないと思います。

　日本の強みは、プロジェクトの企画や運営マネージメント、実効性などの点で他のドナーより優れているのではないでしょうか。成果の評価などもしっかりやってきています。

※　このインタビューは、令和３年８月に行われたものです。